

# Message

コロナ禍は音楽や芸術に携わる者にとって容赦無く表現の場を奪い取り、それまで当然であったことが全く当然ではない世界を私たちの前に突きつけた。

「表現することは生きること」と保育士・幼稚園教諭養成課程で教え続けた教員としての存在や、心に届く音楽の響きを探求し続けた音楽家としての存在も、足元から崩れていくような日々だった。6月以降芸術活動は徐々に息吹返しているが、刻々と変化する状況の中、未だに暗雲が晴れる気配は感じられない。

創作や演奏に携わる芸術家として現在何が表現できるのか、したいのか、発信できるのか、自問し続けている。発信したいメッセージは星の数ほどあるが、祈ることしかできない今、「祈り」をテーマとしたパイプオルガンのプログラムを構成することは軽薄だと、人生で初めて感じた。人間の根本的な存在意味について考えているうちに「光」をテーマとしたいとも思いプログラムを構成し始めたが、事態の収束が見えない中、演奏家として「希望」については表現できないと、限界を感じた。

最終的には、コロナ禍が、演奏者や表現者だけではなく、聴衆にも社会にもこれまでに経験をしたことがなかった様々な感情と現実と直面させた事実を思うと、演奏者の一方的なメッセージを押し付けることはせず、聴衆が感じ取りたいものを感じることができると考えるようになった。そして、未だに思うように言葉を発することができず、表現活動をするのができない芸術家にもなぞらえて、コンサートを「無言歌」と名付けた。

演奏する作品は、神への信頼のうちに純粋な祈りの音楽を追求し続けたバッハの曲を軸とするが、円熟した後期の作品ではなく、バッハ自身がまだ探求途中であった前期から中期にかけての作品を敢えて中心に据えた。後期の作品からは、小品である4つのデュエットを選択した。

バッハ作品と交互に、今、共に名古屋でコロナ時代を歩んでいる作曲家マイヤー＝フィービヒの作品を対比させ、無調性でありながらも響きと調和に重点を置く現代（いま）の音楽を提示する。

両者とも深いプロテスタント信仰に根付いた作曲家であり、多数の讃美歌を定旋律とする作品が存在するが、今回は意図的に讃美歌のメッセージ性も排除し、「前奏曲」など抽象的な内容の作品のみを演奏する。

人間には個性と同じく一人一人異なった感じ方があり、様々な表現がある。

感情表出としての表現も、芸術活動としての表現も、聴き手であれ演じ手であれ、そこに何らかの心動く経験や呼応が生まれることが、次の瞬間とこれからの時を築く新しい創造の力になると考える。

「無言」を通して聴き手自身に様々な想像を委ねることは、想像が創造となって、この時代を歩んでいく為のたくさんの小さな原動力となるかも知れない。何かを感じてもらえれば良いし、感じずにただ音楽に身を委ねてもらえるだけでも良いと思う。

しかし、響きと思いは必ず何かを動かすと、信じている。

(2020.8.20)



## 吉田文 Aya Yoshida

名古屋生まれ。幼少よりオルガニストを志し、中学卒業と同時に単身渡独。ドイツ国立ケルン音楽大学カトリック教会音楽科、並びにパイプオルガン科を卒業。ドイツ国家A級オルガニスト資格、ドイツ国家演奏家資格取得。

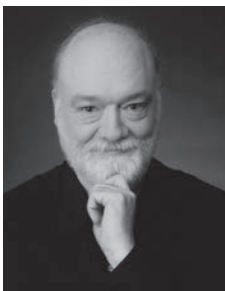
17歳で由緒あるバーダーボーン大聖堂のオルガン・ツィクルスに抜擢され、メシアン「主の降誕」全曲を演奏して以来ヨーロッパ各地で活発な演奏活動を続けており、諸国のオルガンコンサート、音楽フェスティバル等に招聘されている。2014年にはベルリン・コンツェルトハウスより招聘を受けリサイタルを行った。

1995年より2006年までケルン南部司牧地区教会音楽家として勤務。典礼音楽の総責任者、またコンサートシリーズの企画・運営、教会音楽フェスティバルの総監督としても活動。独自の企画による2枚組CD「Streiflichter」は多くの現地専門誌で高得点を得るなど、その芸術的価値は多大な注目を浴びた。

日本では1992年以来名古屋、東京、大阪、京都、札幌の諸コンサートホール等で意欲的なプログラムによるリサイタルを行い高く評価されている他、2006年より活動の拠点を日本に移し、オルガン音楽と教会音楽の普及に力を入れている。オーケストラ、合唱、諸編成アンサンブルのパートナーとして定評を受けている他、現代舞踊など異文化とのコラボレーションにも力を入れている。

2012年8月にはJ.S. バッハの未完成作品と編曲作品を集めたCD「Fantasy 1720」をニューヨークのzoho社からリリース。2015年度名古屋市民芸術祭特別賞受賞。

名古屋女子大学准教授（保育内容領域「表現」、音楽）。南山大学非常勤講師（教会音楽）。南山大学エクステンションカレッジ、朝日カルチャーセンター講師。「名古屋オルガンの秋」主宰。日本オルガニスト協会会員。



## トーマス・マイヤー＝フィービヒ Thomas Meyer-Fiebig

1949年ドイツ・ビーレフェルト市に生まれる。ビーレフェルト市マリエン教会の主任牧師を父とし、幼少の頃からパイプオルガンを始めとする教会音楽全般に多大な影響を受けながら育つ。デトモルト国立音楽大学へ作曲専攻にて入学。作曲をヨハネス・ドリースラーとギセルヘル・クレーベに師事。1974年に教務課程科を卒業、ドイツ国家資格を教務課程において取得後、1975年には音楽教育家のドイツ国家試験を取得。引き続き同大学院作曲課程科に学び、1978年に卒業。

1978年来日以後、国立音楽大学及び大学院にて作曲科の教授として後進の指導にあたる。ドイツ各地の大学にても特別講義講師としてたびたび招聘されている。

2015年国立音楽大学退官。国立音楽大学名誉教授の称号を得る。

作品の分野は諸編成の交響曲、室内楽曲、声楽曲から和楽器のアンサンブル曲等にも及び、中でもパイプオルガンのための作品はその創作活動の中で重要な位置を占める。これらの作品は世界各国の多くの演奏家により取り上げられ、ドイツ放送局、西ドイツラジオ、ヘッセン放送局、出版社より出版されている。又、多くのパイプオルガン曲、並びにピアノ曲を中心とした室内楽曲がドイツのメーゼラー出版社と全音楽譜出版社より出版されている。

作曲家としての活動の傍らオルガニストとしても活発な演奏活動を続けており、1998年にはドイツのエルトツ山脈地方ナッサウのジルバーマン製作の歴史的オルガンにてCDを収録した。

2019年度名古屋市民芸術祭特別賞受賞。